武田晴信朝臣百首和歌

へ 4
3810

葦ふにおりふるのみちを敷島して名つはし
ことのはすひくものこゝろえ流く玉くけなる
紀ゝいのちとたまの緒やのまことによそひて
ぬる玉のいはきのみなもとにれ給むる
こゝろふむしの人のこゝろしきやはなこと
その川柳とてあつまるは本ぐ給ひ
花も筆も力いさや木杉を風吹き散ることの
名人の見る手から絶えすらん紀之続あくまて

門 一別 4
號 38/10
巻

大小澤啓行謹校

武田晴信朝臣百首和歌

東都　耕文堂梓行

大正七年九月廿七日寄
高田早苗氏贈

くさひはくし和歌の道にあそひてかね
發て花とんむきいねまれいまれ人あ
なれしとは今さら得ぬ事ともにかけ
作ててかかめるみつゆあまゆ八帝
力何かあるといひ尾られなれとも西
外しまれなれて芸およしたきられちと
たまゆふはたまふの花もむしみ人よ
た残られ是と外とおそく人あるいに

兵と明のいてやなきよみのあひのくまて
をとめやくし統ひ定け田州きさ左奔
そおなまへかれたけ又とと佐ささ信もい
そし庵まのたよしるあく海しくす
繁門飛くさめ絶さく年よれまたる連
と海へ里私て海をたまひし百れるの
よ紙乾免りし櫻本あまれし川く世よ
清さ樂むあてかきのくふ書田の神

宮太小津歌行くのからぬ末乃くのみ寸
らを志らふをと人ふつさきてかまへつゝさ
を楚之よと云ふきもし上れくもあけ
濃うひしことくとあらすあつ亀ふ事とは
清う志しつゝて弘賢ねもひえしことあ
里みて猶安原よみ人ハ日志とふやまと紀
心をすく以清も父をとかきり小にねをひと
梨ぬる事手にかく阿きあつまと於もふ

志ら須てはのゝ数ことれなきほなし
このみ清乃何にみすふよる之るいとも地の
らいのまゝ甲物事はいともすこやかのねの
いふみらのの人をねさ海まにおよひこゝま
安永をかまを経されと伊勢をとく人を
ますまりて志ろしみ朱子のいふ志
なし志つゝかむかさ陵あるこゝものゝの
ひと可きも度よ清ふへさし小清田栄

こゝろざしはげしける文政六とせむ月
なかのれ七日六年あまりの三好おきそれ邵賢
[illegible]

法性院信玄大僧正傳

高田與清撰

武田晴信朝臣ハ初名を勝千代といふ。父ハ陸奥守信虎。母ハ陸奥守大井信達が女なり。そのもとつおやハ清和源氏より出て新羅三郎義光のそのこなんありける。義光刑部三郎義清をうむ。義清常陸国武田の里に住て武田冠者といふ。これより武田を族の称となす。後甲斐くにの市河庄にうつりすむ。義清逸見冠者清光をうむ。清光武田太郎信義をうむ。信義伊豆守信光をうむ。信光小太郎信政をうむ。信政伊豆守信時をうむ。信時伊豆守時綱をうむ。時綱伊豆守信宗をうむ。信宗甲斐守信武をうむ。

信武刑部少輔信成をうむ。信成陸奥守信春をうむ。信春陸奥
守信元をうむ。信元安藝守信満をうむ。信満三郎信重をうむ。信
重左京大夫信森をうむ。信森陸奥守信昌をうむ。信昌左京大
夫信縄をうむ。信虎は信縄の子なり。晴信朝臣は大永元年甲斐
の国府にてうまる。此時諏訪大明神奇瑞をしめしたまふ
ことおほかりき。ことし駿河國の敵。飯田河原に出て信虎とせむ。
信虎荻原常陸介が計にしたがひて。これに打勝しとき生れ
たればとて勝千代と名づく。勝千代さとくおとなしくしてその
こゝろだましひ世にすぐれたまふ。天文五年三月朔日歳十六にて元
服をとく。従五位下守大膳大夫兼信濃守に任じ。公方萬松院殿

より御諱の一字をたまはりて晴信と名のりぬ。弓馬はいふもさら
なり。からやまとのざえにいたりてつくり出し詩歌いと妙なり。天文七
年三月九日。父信虎駿河国にうつりて。今川氏にまらうどゝなりぬ。
同八年中秋の比まで板垣信形が諌によりて。詩歌翫弄をやめ。もはら国をと
とゝのふるよしをよんじ。これより後その威稜隣国にふるひ。甲斐
信濃二國をすべてをさめ。上野武蔵相模駿河遠江参河飛騨越中
など八国の所々をかねて。四十四万八千八百貫の地をふさねらし
かくて。兵馬四万八千餘を率たまふ。歳三十一の春入道して。法性院
機山信玄と号し。永禄九年に大僧正に任じ。此時僧の載藏主にお
ほせて。京都妙心寺の玉鳳院に墓をつくる。石率塔婆をとゞそその

下に其の分爪と髪とを埋ましむ。それより天文五年十一月廿一日。歳
十六にしてはじめて海野口の軍せしより後。戦の場にのぞむことは
七十たびなれど。遂に負しことなし。天正元年四月十二日。
歳五十三にして世をさられぬ。いまし甲斐国恵林寺にはうぶる。其嗣
伊奈四郎勝頼天目山にほろびて。永く国をうしなふ。
賛曰。なましひに甲斐のくにをとられなんと。はつかばかりのつが
ひものの。いやつぎづくよし。まろがやうしいきつよし。にぞある。
あとさるまぞとを。たゞなかて軍のみちくれなけの世人にはぐれ。
さしなしぶ。隣の国をおひやりしだひげとをいはれ。みな人の。
おぼえみやしこみ。まつろひし。武田の家をたうつせみしぴべの
なければ。かくれぬの。ちゝぶれの国々。此国をとほしてゆかせば。子の家も
とうゆぶの家を。それくまゝと。ましひかねてこぐふねの。ほろ
びにしかど。ひなざかる国人ゝぞわすれざらんこともの世までに称
ぞと。たけきこの名をかたはばかる毋。

小倉山荘色紙和歌

天智天皇御製

秋乃田のかりほの庵の
とまをあらミ我ころもてハ

宮了澪く

永禄二年秋 信玄（花押）

右信玄大僧正真跡輪池屋代先生以其藏本所臨摹也今奥松屋高田先生所撰之本傳合刻而附百首和歌之巻端云

大小澤啓行謹識

詠百首和歌　晴信

早春山

いまはゝや霞けなるにとよしれ山まやはるれかちりしやまかせ

海霞

こせちやなはつとゝくかすみゆく磯波のこゝろのまつやなかめの

朝鶯

あちかひしまやの軒端の呉竹のねつきかためよけさなくなん

田若菜

としのつもるをいそ代なるみやまかへる小田の七くさは

残雪

春なりしなかめにまよふ家居のたもとの梢のゆきのむらきえ

梅風

たつねける梅のた枝はをらねとも袖にかほる軒のはるかせ

岸柳

ほころひのきしのなかるかせのうにみえそむる岸柳のいと

春月

霞たちふかき空のさる風のかすみにかすむ月の夕かけ

帰雁

ともはなれふ雁のかへるさ春くれてひとりかへりての月になくらむ

待花

さくらねすまちたる人をとこそしのふ山の白雲花とや

見花

みるかにもやいつれとしつくもの梢の山のあたるの夕くれ

夕花

はるかくも梢のもとの夕たえて月かけやとせ花はいろそふ

山家花

おもきはよまにいとよ行し山さとの花そ見にまつるへ打のくれ

落花

たつねりやちるはとしものやまさくらさそふ嵐にあやなたるとも

苗代

山河をとまかせてこれハちる花わと苗代小田よかゝつなくなわ

雲雀

かすむわてろうもゆく春日の入ぬひきハいこ此になくし

野菫

あこれさく野らぬ神よとく春とそちらしや春の名残よ

河鹿

玉川ぬきしぬ山ふき縄わかなとハいろなる声あくれかな

浦霞

あれつゝもなわてかさしん水底にむしさきいつき田子の浦の霞波

暮春

まれよ行ふやよひぬ空もふくれぬなをやかたみなきの衣手

更衣

もちのいろよなれしたもとも今日よりやさきわよかつる袖のさきの

卯花

板垣のもちぬさかわそふる流とれ卯花月もかけぬはやハき

夜郭公

うちつけよう卅ともきかしほとゝきす人待宵の一声

杜郭公

ほとゝ杜ゝて急とたつねきてまれさくやとる森の下陰

早苗

雨そゝく門田のたゝのまえはほさてやさなへとるらし

花菖蒲

けふやあやめのふきそへのそへにけふいつかとそ人をまちしや

南

花橘 白

袖のかをとめきなはちるつきまてかほれはかやふるくれはなし

五月雨

さみたれに庭のやり水あふれとふ浅茅かまかきなみにうつる

夕顔

たのまれぬよるのまとこめて植しをとたく夕顔に露もおけ

夏月

かりねして山のはいつるたつ月は月みるかけやふかくるはるかぬ

瞿麦

かつらそて粉いろふかしさとらぬをやもつたれふかの夕かほに

夏草

家やとの軒のしたくさ夏ふかみ誰かけもやましけるかな

鵜河

そこともなくかゝりやもつくますをさよ川ようつる篝火のけ

夕立

吹きならふ音をきかぬ山のは[illegible]まて雨のふる夜のむらくも

〇四

納涼

夕たちのなこりの庭きよみまつかえに秋の風かよふらし

初秋露

秋きぬと軒のしのふにおかせさえて袖にしられぬ庭の朝露

七夕雲

たなはたのくものころもと天の川の袖さしかへすまれのいもせ

庭萩

萩の葉にうつしつ秋のいろそへて更に物さひ庭の松かな

さらぬたに物おもふ庭の萩原やまたひとく秋のいろのこゑ

野虫

きかしたゝ浅茅かもとの虫の声こたへしね秋の夜はさむけ

初雁

秋きてのはつかりは夕くれのくもはたそのよそかりの声

原麻

こゝとさみたるよにかかねてさひさそふ小男鹿

明まよふかきしのつてにさよしかのこゑまめさ浅茅原のかみ

秋田風

小山田の稲葉をしなみ吹色に月かけうつる露のしら玉

山田もる仮庵にきそへていなつまのそよく秋のゆふ霧

秋雨

秋のよのまど打雨のおとはらはらとすゝしにちかきのきのまつかせ

河霧

かはくまもえこそはみえね河きりにさほならすなりうちのしばふね

山月

よふかくにねられぬまゝと秋のよはおもひ入さの山のはの月

池月

雲もなき二月かゝみと広さはの池にすみぬる月かけのかな

浦月

なみ枕やとるやとりのうら風にきくねさめぬる秋のよの月

古寺月

おもひしとかられてゝの秋の月おなしあかつきのかねやと

残月

みるまゝに秋はふけぬる月かけの西にかたふく秋のつれなのそら

擣衣

ねよとてもさらにさとこそ秋の夜を衣うつなるこゑのさやけさ

野分

ゆふくれのきりのまかきの風のまに尾花もなひくそよきにも

のわけしく尾花もおちて野にみえてくれはてゝ秋の夜

鶉

ふかくさのかきねのくれの風にふきみたれてもなく人もなし

く

水辺菊

千とせやと君まつきくのいく世へてたえし露や庭のやり水

家郷

そめてくれまなくしくれのふるさとにいろ／＼木ゝねのもみちら八

惜秋

暮月のこよひや秋のかへるさとおもほしくもおもほゆるかな

落葉

なきわたるしもしき嵐のこゑにしていろ／＼つもる落葉なりけり

時雨

ふりそふる神のなみたに夕しくれさしてもはかなしくれねさむ八

野霜

れへみな霜とおきまよふむさしのは出し秋の名残さへなし

江寒芦

難波江の芦のまよひの風はれてよるのみさむくなれなさむさ

池氷

池のおも軒れまろ風吹まけて衣手さむしこほる霜夜は

冬月

かえさゆるよの河しにまよれて雪にきえとれぬ有明の月かけ

千鳥

さよふけて河風さむみ鳴ちとりわたるもよふかき氷に月れやかくく

く

水鳥

をしかものうはけにふける霜をはらふ羽風もさむき夜半の嵐

篠霰

とふ人もなし更ゆくふる内のよは篠のはそよくおとかはるなり

山雪

ふみわけてけさ行人の跡とへは雪にてちりける谷わけける

松雪

岩ねよりつもりゆきにそなひく松の葉のつもれわかんよの松本粕

寒梅

咲かねたるかたえの雪の枝なかにはなれきえてふれたかうらん

炭竈

ときはやまたくすみかまの夕けふりたえぬ雪けの空にかゝるらん

埋火

露とさへ衣かたしきひとりねの床にわかみもひとつ埋火

歳暮

くれはまたことしも今はあすきぬのなかくるゝまでをしきかねなれや忘れ

忍恋

かくれぬのそこのあしはさえてもえやひとにかゝらん

ちかひつゝいつもねもれしとおもふてたなかなかにわけける人はなかりき

おもひしたつれたきくれ人をともすれわすれのこゝろのわすれくらと

とれつゝ手をとかきわれとし肩とふるのなみされたゝはゆらく

不遇恋

たのめおくこよひ待まの袖の香に秋の月さへかけもやどさし

後朝恋

さよころもなれにし人の形見をそうつしてとまる庭の朝顔

打はらふ袖もをしまいつるたちかへるわかれにけさのそのうつりかや

恨恋

恨まひおそれいくよの枯れなと待くるまにやとわれむらん

夕くれはたのめやと此庭の面よらみをとそふる露のちらんの色

なのまゆよ人のこゝろのつれなさをとらへしるかとたえも更ゆくか

久恋

きみつゝふるなみされ嵐はさよころもかさねてもいふはくらなん

偽とたのむちかひにくもしきてもおもへはとほしにくる月日はは

絶恋

待わともと絶えし肩れ更ゆれはおもひ路ても秋と待かなれ

そ雪しゆおもひ絶にしとはかわにつくるもよやかなしねなは

よものくにくそのとまらし待るゝはいまさほとしられそ政多おわ

暁雞

うき物とねぐされとうの鳴おれかなほしはへねやかや恋かな

寄竹

かせ吹ハちりつれてかへやとれともとてねもふきとれぬ舟たか

名所関

清見かたこゝせきや神のたちまち月かけ所とやよせきて秋かせ

霧中野

しれつゝやなるハおれへのかけ枕としたる月か雲かく舟して

山家

やまさとハ月ともにまろかせの二葉よわほうれしつる人何し風

田家

稲葉よりそてにかへしとれハとめつゝあきむしの秋の色

秋夜夢

秋のよのなかき枕をひとりねてあくるまにしもなふいもしく

眺望

なかめ何も佐かけことのまゝかみ芳せハそこはるとたかきあきをとれ山

海路

あるかもしてなみハうつに何のしかたてゆたふ波まつつる月かけ

述懐

いくとせよことのひとつに秋をこそさいしゆハこそ月ハみてまし

懐旧

まちられぬむかしなたねていりへをとしの雨れかちききるつゝし

神祇

よとせみなもかふるき椰営をはじめてそいのる末ながきのため
ことしなれけるにちとせをも復古の二字の松の色ハかはらし

穐啓

社頭祝

いく山のなかさしさへもろこしのこゝろにかなふ月影
きみをいはふかもかものやしろはよろづよかけていく代を

某丹もつくる

いでや源義家朝臣ハいにしへ大将軍にて武を人はたれ
にほこりて心をふかくたしなひて弓射馬力とるまさ
さとよくしたまひしより甲斐国ハ武田晴信公
又それの君子孫さかえみちにいそしみ弓射たちまさる
ますことよくしたまひてかれ朝臣のみまさしかれおさめ
へしと世の人のかたるをきくにつけて其の国がくハ
大将軍の御かしこきを御の代よろこふまゝ参河守紀
叙ふみをくはへ世にひろくれて御まもりの記詩文
とそれうるはしきその花とのこしたまひしとはのる
にきく晴信公ふるかく其序を御しるとかし古

此ごろの頃よりや立たまくら起請文とみるにはよき
いとよしくちしるきものはとおしなまひつれいかめる
にはいみて恥たまふべきを諸人のうへをきて歌国かくれ
たらるまる文人のなやましきことをせめ抄よろしふまへるゑん
案郭よよとまよ表しまの巻にふるくして書生と
何ともひて写せさするともちくにてたまひまいらしとる
時に信夫とさらに高くとあかせたまひて仏旗くし軍の
らちにも月花のとわにの抄もひとれかくたまへるはかの郎に
にも抄よりせたまそねよと世くそそへて何ろつろふをきけは
まつの国かしこやひたる高人のなやましことども抄の代文

よろこばしかくろとゐまさいふ文かきてあらむとすまへて
いまこれ人にもとをしなとしにはてよこやひたるふかきん
なくしいはきまにも恥らるへきまく浅るもまさ此人にはしかし
と抄へいなの此いとくよろこひとせきあるすけんこの古れ談に
いましく文德なをものまなさやけれ作をとうけて平家物語
其述甲斐国志なやる清いそくわもらくとらく何たのくわなかに
しとをかに巨麻郡加賀見のさとれはきすにかのちのおにはかう
よこいもなまひみたわとそしるなるし二たてき露なさしなたかける
とうはしなつとそかの此うこせてれしかんにとめてよろこひ
清やこそ侍さまなく巻のなけくわるも侍ひれそるかしせ

まて法をかそうハしさ不妙の世よ迄て人にもてのやま
せんと初めひらくとる肉まやうそはさるかくいるの雅れ行ひに於
わて高き風は性しなぞ何きらし文藻とよく續うせねとまして
いかしまんせん予へなく出しみにたへ見そ背けるとるの侭れと思ひ
起したるいうて様むとてかく極まい出し世ほるきかくあ
しして世よ恐ろくほとこしたらんにの武士はさる世不深
き恵まふかきゐむくさんことえたるまく妙の内からの此
夫れいとされいたれるほとともてさむやさとひとつ也によ
ろふんのほこれ国にいし世おし 富士浅間代 祢岩
二言人 大小浮瑠璃行ふ

耕文堂蔵版目録 京橋銀座三丁目 伊勢屋忠右衛門

新増四聲 節用大全 横切本 真字附 近刻 全一冊

数百種の節用集あまねく世に行はるといへども漢字の文字を或ハ俗用の文字多くかへつて日用書簡の文字をいろは分けにして字毎に音訓を附し一字を見て其字を知るの便利とし又別に漢の文字を集て日用の大全となし且文字の書きそへ遺さぬやうに志て俗用日用の至宝なり

祖徠先生 國學弁全弁翼 一名國学荅問書 全二冊

此書ハ世俗神儒仏の三道と双称して也も其是非を論ずる堅執をさとし国学の大意を述られたり

國學正辨 立綱上人作 近刻 全一冊

此書世に刻本数多あれど誤字多し今これを正し假字をよく使ひならふへし

擁書漫筆 松屋高田先生著 画入大本 全五冊

此書ハ古今の文人雅客の随筆連俳の説或ハ名家の雑説を集めてかく和漢の説をあげ考証を記し且古人未発の説をあげ七脩類藁積日知録陵陽叢考などの類中でもあまた見ざるの随筆なり

うきさすれ路 大寂庵立綱法師著 初篇 二篇三篇嗣出 全一冊

此書ハ上人の随筆にて古今の考へ面白き人の説を書あつめられて大よそ人まで御國のまなびある人よたすけとなるべき書なり

諸國富士根元記 高田先生著 全一冊

此書ハ諸国の富士を書集められたる書なり

一休[illegible]このぐみ 全一冊

古今和歌集 [illegible]寸璋筆 全一冊
此書世に刊本あまたあれどもかなづかひてにをはのあやまり多くして見ぐるしきを[illegible]其かなづかひによりて改正し新に板に[illegible]

頭書伊勢物語 大本 全二冊

大寂庵立綱法師著 伊勢物語昨非抄 近刻 全三冊
この書ハ古人の諸説にかゝはらずして心を[illegible]多くの書[illegible]心を用ひられて[illegible]せちせられしと三十[illegible]人感をあらはしとふことなしとぞ

真字二躰 千字文 千蔭大人書 正面摺

朗詠詩哥 浅紅帖 同 全一冊

月並消息 同 全一冊
此三帖ハ橋本經亮大人の[illegible]先生の[illegible]

周府君之碑 王羲之書 正面摺

蕪文忠公之書 全

圓其帖 米元章書 全

御家改書帖 [illegible] 全一冊

尾濟書札集 全一冊

大橋流和文章 明甫先生書 全一冊

同年中書札集 全一冊

月儀帖 烏石山人書 全一冊

獻壽法帖 赤井得水先生書 全一冊

通俗用文章 法家日用 [illegible] [illegible]大本 全一冊

文章達筆 [illegible] 全一冊

増補 江戸年中行事 懐中本 近刻 全一冊

文政大雑書 半紙本 近刻 全一冊

袖玉狂哥集 [illegible] 全二冊

相馬日記 高田先生著 蕙斎先生画 全四冊
此書ハ武蔵の[illegible]辺より下総の[illegible]

景清外傳 徫山翁作 歌川国直画 初篇二篇三篇 全十五冊

津磨加佐禰 同作 同画 全六冊

文覚上人発心之記 橋供養 同作 雷洲画 全五冊

同後篇 同作 勝川春扇画 [illegible] 全五冊

同三篇 嗣出 全五冊
此編ハ[illegible]

旧観帖 発端 奥州道中の記 十返舎一九作 全二冊

萍跡紀聞
立綱上人著 近刻 全二冊

この書ハ上人経歴（けいへき）せしさまのおもしろくをかしき[illegible]新撰[illegible]

萍跡静話
同人作 近刻 全一冊

此書ハ八人[illegible]のことを[illegible]

さらしく日記
同人作 画入近刻 全一冊

この書ハ[illegible]

全後編
同作 嗣出 全二冊

これハ奥州より江戸なる喰町へ着までの[illegible]の滑稽（こつけい）[illegible]十倍（ばい）なり

旧観帖
初篇二篇三篇 全四冊

此書ハ奥州山家の[illegible]江戸[illegible]甲州[illegible]

御書物類
和漢軍書新本古本[illegible]

繪入よみ本類
新板[illegible]

浄瑠璃本
[illegible]

朝鮮 御免

粒甲丹
大人小児万病[illegible]一切

一錠金百疋　半錠金貳朱　半錠銀四匁

賣弘所

江戸京橋銀座二丁目

書林 耕文堂

伊勢屋忠右衛門